

国道近くの散策路を外れて、雑木林に分け入った僕ら七人は、朽木や落ち葉を踏み越えて山道を進むと、どこだか知らない枯れ草のしげる原っぱを通り抜けた。十メートルくらいの深さの谷間にかかった、古そうな木橋までやって来たときには太陽は山並みの向こうに見えなくなっていた。

隆平が、太い腕で、丸太を組んで造られた欄干を揺さぶる。

橋がギシギシと音を立てるのを聞いて、彼は、レスラーみたいな彫りの深い顔を歪めた。そして、隣の裕哉に言った。

「おい、マジでこれ渡んの？　聞いてねえよ。落ちるんじゃないねえの？」

「いや、流石に大丈夫だって。俺、前に通ったけど、そんな危なくなかった。全然いけるよ。ほら」

裕哉は、橋の上に一步踏み出し、両腕を広げて体を揺すってみせた。

どうせ、他に道はない。先をゆく裕哉に僕ら六人はついて行くしかなかった。

橋を渡り切ったところで、僕はウインドブレーカー

のポケットからスマホを引っ張り出して、時刻を確かめた。午後四時四十八分。

僕がスマホを握っているのを見て、蛍光色の派手な登山服姿の花が歩速をあげ、隣にやって来た。右手に自分のスマホを掲げながら訊いた。

「柊一さあ、電波繋がってる？」

「いや、もう一時間くらいずっと圏外」

「あっそ。うちも。これさ、今日は別荘には帰れないってことでいいんだよね？」

誰も返事をしない。それが無理なのは、みんなが分かっていた。

橋を越えると、急な山に囲まれた荒れた野原になった。そこをさらに数百歩進むと、裕哉は大声を上げた。

「きたきた！ 見えた見えた。あとちょい。もうすぐそこ」

背後から、不満と不信の視線を浴び続けていた裕哉の声には解放感が滲んでいた。しかし、まだ建物の入り口らしいものは見えない。

今日の午前の話である。みんなで湖でボートに乗っ

て遊んだあと、裕哉はこんなことを言い出した。

「こっから歩いて行けるところでさ、すごい面白い場所があるんだけど行ってみる気ある？　山奥にさ、めっちゃでかい地下建築があるんだけどさ。なんか、昔やバめのことに使われてたっぽいんだけど、多分今ももう誰にも知られてないんじゃないかな」

昨日から、僕らは、裕哉の親父さんの所有する長野県の別荘に集まっていた。

裕哉は大学時代の友達で、集まろうと発起したのも彼だった。学生時代によく遊んでいた六人の、ちよっとした同窓会である。

みんなと会うのは二年ぶりだった。金髪に黒いピアスをつけていた裕哉が、染めるのをやめてピアスだけになっているのに、僕はまだ目が馴染まない。

少し思うところのあった僕は従兄を連れて来たので、別荘には七人で泊まった。

山奥の地下建築。こう聞かされても、ピンと来るものはいなかった。

地下建築なんていう面倒なもの、それもものすごく大きいものらしいのだが、そんなのを、どこの誰が何の

ために山奥に造ったのか？ 信じ難いが、裕哉は半年くらい前にそこを見て来たのだそうである。

興味はそられるし、遠くないのなら行ってみてもいいだろうということになった。

ところが、話に聞いたのと違って、歩けども歩けども、地下建築にはたどり着かなかった。気楽に二、三十分も歩けばよさそうなことを言っていた裕哉は、終始不安げにスマホの地図を睨みつけていた。

地下建築は、当然ながら地図には載っていない。裕哉は、以前に訪れた際に場所を地図アプリ上に記録しておいたというのだが、どうやらその位置が実際とかなりズレていたようだった。迷った末、ようやく場所が分かったころには、もう、日が暮れかかっていた。

「で、裕哉？ お前さ、その地下建築？ そこに泊まる気ってことだろ？ もう帰る時間ないんだし。いいのか？ なんかかなりヤバイ場所だって言っただけじゃなかったか？」

「いやだから、昔ヤバイことに使われてたかもって話だって。昔だから。別にちよっと使うくらい大丈夫。誰もいる訳ないから。廃墟巡りみたいなもんだし」

隆平と裕哉は、僕らを十メートルばかり後ろに残して、先を進んでいく。

ここに来るまでも、ずっとそんな具合だった。隆平は、みんなを代表するような調子で、案内人の裕哉に不平を言い続けていた。

隆平の様子を見て、右隣を歩いていた麻衣が、僕に困ったような、あるいは取りなすような笑みを向けた。宵闇の中で、彼女の白っぽい顔に、睫毛の長い眼がかえってくっきり浮き上がって見えた。

返事をしようとしたが、きつと隆平に聞こえると思うと口を利くことはできなかった。麻衣もそれを求めてはいなかったようで、隆平に見つかる前にとばかりにそっぽを向いてしまった。

振り返ると、少し遅れていたさやかが、小走りで僕らに追いついた。ウォームブラウンの髪をお団子にした彼女は、額に汗をかいていた。